

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校, 中学校)

第3編 単元(題材)ごとの学習評価について(事例)

【案】

第1章 「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

- 1 本編事例における学習評価の進め方について
- 2 題材の評価規準の作成のポイント

第2章 学習評価に関する事例について

- 1 事例の特徴
- 2 各事例概要一覧

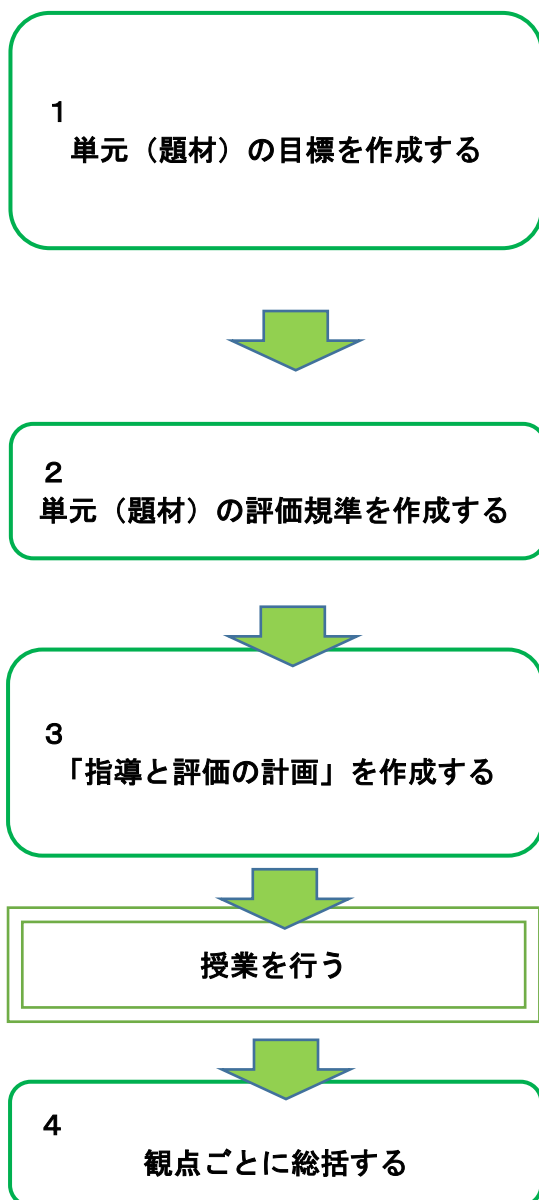
事例

第1章 「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

1 本編事例における学習評価の進め方について

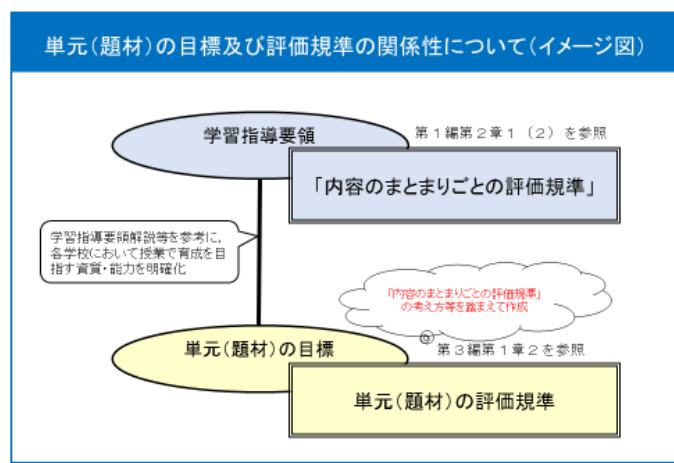
各教科の単元（題材）における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めることが考えられる。なお、複数の単元（題材）にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

評価の進め方



留意点

- 学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を基に作成する。
- 児童生徒の実態、前単元（題材）までの学習状況等を踏まえて作成する。
- ※ 単元（題材）の目標及び評価規準の関係（イメージ）については下図を参照



- 1, 2を踏まえ、評価場面や評価方法等を計画する。
- どのような評価の資料（児童生徒の反応や作品など）を基に、「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり、「努力を要する」状況（C）への手立て等を考えたりする。

- 3に沿って観点別学習状況の評価を行い、児童生徒の学習改善や教師の指導改善につなげる。

- 集まった評価の資料やそれに基づく評価結果などから、観点ごとの総括的评价（A, B, C）を行う。

2 題材の評価規準の作成のポイント

1 美術科における評価規準の設定について

(1) 「内容のまとまりごとの評価規準」の基本的な考え方

平成 23 年 11 月に国立教育政策研究所教育課程研究センターが公表した「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 美術）」では，第 2 編において「評価規準に盛り込むべき事項」及び「評価規準の設定例」を示していた。「評価規準に盛り込むべき事項」は，主に題材ごとに設定する評価規準として，題材の目標と評価との関連を確認したり，題材における評価の重点を捉えたりする「題材の評価規準」を設定する際の参考となるように作成されていた。また，「評価規準の設定例」は，主に授業の中での具体的な学習活動の評価規準として位置付ける「学習活動に即した評価規準」を設定する際の参考となるように作成していた。

平成 29 年告示の美術科の中学校学習指導要領では，その改訂において，教科の目標では，育成を目指す資質・能力を一層明確にし，生徒の発達の段階や特性等を踏まえつつ，(1)「知識及び技能」，(2)「思考力，判断力，表現力等」，(3)「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で整理している。また，内容についても目標に対応して，資質・能力を相互に関連させながら育成できるよう整理している。具体的には，「知識」は，〔共通事項〕，「技能」は，「A 表現」(2) の指導事項に位置付けられている。「思考力，判断力，表現力等」は，「A 表現」(1) 及び「B 鑑賞」(1) の指導事項に位置付けられている。「学びに向かう力，人間性等」は，「A 表現」，「B 鑑賞」及び〔共通事項〕を指導する中で，一体的，総合的に育てていくものとして整理している。

このように平成 29 年告示の美術科の中学校学習指導要領では，育成すべき資質・能力と学習内容との関係を整理し，一層明確に示していることから，従前のように「評価規準に盛り込むべき事項」及び「評価規準の設定例」の関係のように細分化せずに「内容のまとまりごとの評価規準」だけを示すこととした。事例においても「題材の評価規準」と「学習活動に即した評価規準」の両面から題材の評価規準を設定するのではなく，題材のまとまりごとに，それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行うこととし，「内容のまとまりごとの評価規準」を基に設定した「題材の評価規準」によって評価を行うことにしている。

評価を行う際は，これまで同様に，題材の目標，学習活動等に応じて「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点の趣旨を生かしながら適切な「題材の評価規準」を設定することが大切である。

(2) 「内容のまとまりごとの評価規準」の活用

○「題材の評価規準」を作成する

題材の評価規準は，実施する学習の内容のまとまり（「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現『A 表現』(1) ア(2)，〔共通事項〕」，「目的や機能などを考えた表現『A 表現』(1) イ(2)，〔共通事項〕」，「作品や美術文化などの鑑賞『B 鑑賞』，〔共通事項〕」）ごとの「内容のまとまりごとの評価規準」を基に題材の内容に合わせて設定することが考えられる。例えば，【図①】「事例 1：花の命を感じて」の「知識・技能」，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」では，「内容のまとまりごとの評価規準」の下線部を，題材の内容に合わせて題材の評価規準の下線部の表現に変更

したり、複数の評価規準を一つにまとめたりするなどして「題材の評価規準」を設定している。

【図①】

「事例１：花の命を感じて」の題材と関連する「内容のまとまりごとの評価規準」※

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
・形や色彩、<u>材料や光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解している。</u> ・造形的な特徴などを基に、全体のイメージや<u>作風など</u>で捉えることを理解している。 ・<u>材料や用具</u>の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	・<u>対象や事象</u>を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、<u>想像したこと</u>などを基に主題を生み出し、<u>全体と部分</u>との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 ・造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	・美術の創造活動の喜びを味わい楽しく<u>感じ取ったことや考えたこと</u>などを基に<u>した表現の学習活動</u>に取り組もうとしている。 ・美術の創造活動の喜びを味わい楽しく<u>作品や美術文化などの鑑賞</u>の学習活動に取り組もうとしている。

※事例１「花の命を感じて」（第１学年「A表現」（１）ア（ア）、（２）ア（ア）、「B鑑賞」（１）ア（ア）、〔共通事項〕（１）アイ）と関連する各「内容のまとまりごとの評価規準」から整理したもの



（２）「花の命を感じて」の題材の評価規準（第２編を参考に作成）

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
知 形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、<u>美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。</u> 技 <u>水彩絵の具</u>の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	発 <u>花</u>を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、<u>生命感</u>などを基に主題を生み出し、<u>画面全体と花や葉</u>との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく<u>花の美しさや生命感</u>などを基に<u>構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする学習活動</u>に取り組もうとしている。 態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく<u>花の美しさや生命感</u>などを基に<u>見方や感じ方を広げる鑑賞</u>の学習活動に取り組もうとしている。

知＝「知識・技能」の知識に関する評価規準，**技**＝「知識・技能」の技能に関する評価規準，**発**＝「思考・判断・表現」の発想や構想に関する評価規準，**鑑**＝「思考・判断・表現」の鑑賞に関する評価規準，**態表**＝表現の「主体的に学習する態度」に関する評価規準，**態鑑**＝鑑賞の「主体的に学習する

る態度」に関する評価規準を表す。

※それぞれの評価規準は「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりするなどしている。（下線部，下線部は変更箇所）

単元（題材）の評価規準作成及び評価のポイントは、以下のとおりである。

（１）「知識・技能」

○知識に関する題材の評価規準

この観点とは、表現及び鑑賞の活動を通して、「造形的な視点を豊かにするための知識」として、形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果を理解することや、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解することについて評価するものである。ここでの知識は、表現や鑑賞の場面において、学んだ知識を生かして、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりできるようになるなど、単に暗記することに終始するような知識ではなく、美術の学習の中で生きて働く知識として実感的に理解した実現状況の評価することが求められる。

題材の評価規準は、題材の内容に応じて〔共通事項〕(1)について、学習指導要領の「２ 内容の取扱いと指導上の配慮事項」の〔共通事項〕の取扱いと題材との関連を考慮しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりすることで作成することができる。（【図②】参照）

【図②】

第１事例「花の命を感じて」の「知識・技能」の知識に関する題材の評価規準の作成

第１学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」に示された「知識・技能」（知識）の評価規準

- ・形や色彩，材料，光などの性質や，それらが感情にもたらす効果などを理解している。
- ・造形的な特徴などを基に，全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。



第１事例「花の命を感じて」における「知識・技能」（知識）の題材の評価規準

知 形や色彩などが感情にもたらす効果や，造形的な特徴などを基に，美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。

※下線部，下線部は変更箇所

○技能に関する題材の評価規準

この観点とは、造形的な見方・考え方を働かせ、発想や構想をしたことなどを基に表すために、形や色彩などの造形の要素の働きや、材料、用具などの理解と表現方法などを身に付け、感性や造形感覚、美的感覚などを働かせて、表現方法を工夫し創造的に表すなどの技能に関する資質・能力を

評価するものである。創造的に表す技能は制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって表れるものである。そのため制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の創造的に表す技能の高まりを読み取ることが大切である。

題材の評価規準は、題材の内容に応じて、「A表現」(2)の内容との関連を考慮しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりすることで作成することができる。

(2)「思考・判断・表現」

○発想や構想に関する題材の評価規準

この観点は、造形的な見方・考え方を働かせて、自己の内面などを見つめて、感じ取ったことや考えたことなどを基に主題を生み出し、それらを基に創造的な構成を工夫したり、目的や条件などを基に主題を生み出し、分かりやすさや使いやすさと美しさなどとの調和を考え、構想を練ったりするなどの発想や構想に関する資質・能力を評価するものである。発想や構想は、制作が進む中で徐々に具体的な形になり、更にそこから深まることが多い。そのため制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の発想や構想に関する資質・能力の高まりを読み取ることが大切である。

題材の評価規準は、題材の内容に応じて、「A表現」(1)の内容との関連を考慮しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりすることで作成することができる。

○鑑賞に関する題材の評価規準

この観点は、造形的な見方・考え方を働かせ、自然や生活の中の造形、美術作品や文化遺産などから、よさや美しさなどを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫、生活や社会の中の美術の働きや美術文化について考えるなどして見方や感じ方を広げたり深めたりする鑑賞に関する資質・能力を評価するものである。題材によっては、鑑賞の活動が位置付けられていても、それが発想や構想に関する学習を深めるための活動であったり、主体的に学習に取り組む態度を高めるための活動であったりすることも考えられるため、活動のねらいを確認するなど評価規準の設定には留意する必要がある。

題材の評価規準は、題材の内容に応じて、「B鑑賞」(1)の内容との関連を考慮しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりすることで作成することができる。

(3)「主体的に学習に取り組む態度」

この観点の評価対象は、生徒が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けようとし、発揮しようとし、することへ向かう主体的な学習に対する態度である。例えば表現活動では、発想や構想を練るためにアイデアスケッチを熱心に繰り返し描いたり、創造的に表す技能を働かせるために絵の具で色を試したり塗り重ねたりするような能動的な姿が授業の中で現れることがある。また、鑑賞活動では、生徒が主体的に作品などの造形的なよさや美しさを感じ取り、

作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を深めようとしていく姿が見られることがある。評価を通して、表現活動においては、机間指導等の際にこのような試行錯誤を繰り返し粘り強く取り組んだり、よりよい表現を目指して構想や技能を、工夫改善したりしていく様子などの姿を捉えながら指導と評価を行うことが大切である。また、鑑賞活動においては、作品などを鑑賞し、造形的な視点を活用しながら造形的なよさや美しさを感じ取ろうとしたり、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えようとしたりするなどの意欲や態度を高めることが大切である。

題材の評価規準は、題材の内容に応じて、学年の「観点及びその趣旨」との関連を考慮しながら、「内容のまとまりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりすることで作成することができる。その際、「内容のまとまりごとの評価規準（例）」に示された「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準は、各領域の内容のまとまりごとの全体におけるものとして示されているものであることから、題材において評価に用いるときには、題材のそれぞれの時間の学習活動に該当する「知識・技能」、「思考・判断・表現」の題材の評価規準と対応させて、より具体的に生徒の「主体的な学習に取り組む態度」における実現状況を見取ることが大切である。（【図③】参照）

【図③】

第1事例「花の命を感じて」の「主体的に学習に取り組む態度」に関する題材の評価規準の作成

第1学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準（例）」に示された「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

・美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。



「花の命を感じて」における表現の「主体的に学習に取り組む態度」（表現）の題材の評価規準

態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする学習活動に取り組もうとしている。

※下線部，下線部は変更箇所

第2章 学習評価に関する事例について

1 事例の特徴

第1編第1章2（4）で述べた学習評価の基本的な方向性を踏まえつつ、平成29年改訂学習指導要領の趣旨・内容の徹底に資する評価の事例を示すことができるよう、本参考資料における各教科の事例は、原則として以下のような方針を踏まえたものとしている。

○ 単元（題材）に応じた評価規準の設定から評価の総括までとともに、児童生徒の学習改善及び教師の指導改善までの一連の流れを示している

本参考資料で提示する事例は、いずれも、単元（題材）の評価規準の設定から、最終的に学習過程で得た評価情報を総括するまでとともに、評価結果を児童生徒の学習改善や教師の指導改善に生かすまでの一連の学習評価の流れを念頭においたものである。なお、各教科とも事例の一つは、この一連の流れを特に丁寧に示している。

○ 観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について示している

報告や改善等通知では、学習評価については、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、観点別の学習状況を記録に残すことについては、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要であることが示された。このため、観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について、「指導と評価の計画」の中で、具体的に示している。

○ 評価方法の工夫を示している

各教科・科目の評価の中で、ワークシートや作品などの評価材料をどのように活用したかなど、教科の特性に応じて、評価方法の多様な工夫について示している。

2 各事例概要一覧

事例1 キーワード 指導の計画から評価の総括まで

「花の命を感じて」(第1学年)

感じ取ったことや考えたことを基にした表現と作品の鑑賞の学習活動から、題材の評価規準の設定から、各観点の具体的な評価の考え方や方法、観点別学習状況の評価の総括に至る一連の流れを示した事例である。

事例2 キーワード 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「視点を感じて一写そう 私の〇〇ー」(第2学年)

「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、その中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を一体的に見取るための考え方や具体的な方法を示した事例である。

事例3 キーワード 「思考・判断・表現」の評価

「私たちの町を案内しようー多様な人々に伝わるピクトグラムのデザイナー」(第3学年)

「思考力、判断力、表現力等」に位置付けられている発想や構想に関する資質・能力と鑑賞に関する資質・能力の双方に重なる学習の中心となる考えを重視した学習活動における「思考・判断・表現」の評価の考え方や具体的な方法を示した事例である。

事例4 キーワード 「知識」の評価

「和心発見！ー日本美術のよさや特徴を見付けようー」(第3学年)

独立した鑑賞の活動で活用した「知識」の具体的な評価方法や、見取るためのワークシートの活用例などを示した事例である。

美術科 事例 1

キーワード 「指導と評価の計画から評価の総括まで」

単元（題材）名

花の命を感じて

内容のまとめ

第 1 学年 「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」（「A 表現」

（1）ア（ア）、（2）ア（ア）、〔共通事項〕（1）アイ）及び「作品や美術文化などの鑑賞」（「B 鑑賞」（1）ア（ア）、〔共通事項〕（1）アイ）

<題材の概要>

花を見つめ、感じ取った花や葉の形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、全体と部分などの関係を考え創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る。水彩絵の具の基本的な使い方を身に付けるとともに、様々な表現方法を試しながらその効果を生かし、発想や構想をしたことを基に自分の表したい花を工夫して表す。また、完成した生徒同士の作品を鑑賞し、造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げる。

<関連する学習指導要領の内容>

○「A 表現」（1）表現の活動を通して、次のとおり発想や構想に関する資質・能力を育成する。

ア 感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ること。

○「A 表現」（2）表現の活動を通して、次のとおり技能に関する資質・能力を育成する。

ア 発想や構想をしたことなどを基に、表現する活動を通して、技能に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）材料や用具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表すこと。

○「B 鑑賞」（1）鑑賞の活動を通して、次のとおり鑑賞に関する資質・能力を育成する。

ア 美術作品などの見方や感じ方を広げる活動を通して、鑑賞に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（ア）造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げること。

○〔共通事項〕（1）「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること。

イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。

※ 学習指導要領の「A 表現」、「B 鑑賞」、〔共通事項〕の各項目は、評価の観点と対応するように整理している。また、「主体的に学習に取り組む態度」は、これらの学習指導要領に基づいた資質・

能力を身に付けようとしたり，発揮しようとしたりする態度として整理している。（【図①】参照）

【図①】学習指導要領と評価の観点との関連

領域等	項目と育成する資質・能力との関係	評価の観点
A 表現	(1) 発想や構想に関する資質・能力	「思考・判断・表現」
	(2) 技能に関する資質・能力	「知識・技能」（技能）
B 鑑賞	(1) 鑑賞に関する資質・能力	「思考・判断・表現」
〔共通事項〕	(1) 造形的な視点を豊かにするための知識	「知識・技能」（知識）

※「主体的に学習に取り組む態度」は，これらの学習指導要領に基づいた資質・能力を身に付けようとし，発揮しようとしたりする態度として整理している。

1 題材の目標

(1) 知識及び技能に関する題材の目標

- ・形や色彩などが感情にもたらす効果や，造形的な特徴などを基に，美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解する。（〔共通事項〕）
- ・水彩絵の具の生かし方などを身に付け，意図に応じて工夫して表す。（「A 表現」（2））

(2) 思考力，判断力，表現力等に関する題材の目標

- ・花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ，生命感などを基に主題を生み出し，画面全体と花や葉との関係などを考え，創造的な構成を工夫し，心豊かに表現する構想を練る。（「A 表現」（1））
- ・造形的なよさや美しさを感じ取り，作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして，見方や感じ方を広げる。（「B 鑑賞」（1））

(3) 学びに向かう力，人間性等に関する題材の目標

- ・美術の創造活動の喜びを味わい，楽しく花の美しさや生命感などを基に表現したり鑑賞したりする学習活動に取り組もうとする。

2 題材の評価規準の作成

(1) 「内容のまとまりごとの評価規準（例）」から題材の評価規準を作成する

実際の授業において作成する題材の評価規準は，本参考資料第2編に示された「内容のまとまりごとの評価規準（例）」を基に題材の内容に合わせて作成することが考えられる。その際，学習指導要領に示された教科及び学年の目標を踏まえて「評価の観点及び趣旨」が作成されていることを理解した上で次の二点について留意する必要がある。一つ目は，美術科における「内容のまとまり」と「評価の観点」との関係を確認すること。二つ目は「内容のまとまりごとの評価規準」が，第2編に示された【観点ごとのポイント】を踏まえて作成されているということについて理解しておくことである。これらの二点を押さえて題材の評価規準を作成し，単に作業的にならないようにすることが大切である。

本事例，「花の命を感じて」における「知識・技能」，「思考・判断・表現」（発想や構想）の題材の評価規準は，該当する「内容のまとまりごとの評価規準（例）」の一部（ ）を，題材の内容

に合わせて関連する表現()に変更したり、複数の「内容のまとまりごとの評価規準(例)」を組み合わせたりして作成している。【図②】を参考)

【図②】

●「知識・技能」の知識に関する題材の評価規準の作成

第1学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準(例)」に示された「知識・技能」(知識)の評価規準

- ・形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解している。
- ・造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。



「花の命を感じて」における「知識・技能」(知識)の題材の評価規準

知 形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。

●「思考・判断・表現」の発想や構想に関する題材の評価規準の作成

第1学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準(例)」に示された「思考・判断・表現」(発想や構想)の評価規準

- ・対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴や美しさ、想像したことなどを基に主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。



「花の命を感じて」における「思考・判断・表現」(発想や構想)の題材の評価規準

発 花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。

●「主体的に学習に取り組む態度」に関する題材の評価規準の作成

第1学年の「感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現」の「内容のまとまりごとの評価規準(例)」に示された「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

- ・美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基にした表現の学習活動に取り組もうとしている。



「花の命を感じて」における表現の「主体的に学習に取り組む態度」(表現)の題材の評価規準

態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする学習活動に取り組もうとしている。

(2)「花の命を感じて」の題材の評価規準(第2編を参考に作成)

「知識・技能」	「思考・判断・表現」	「主体的に学習に取り組む態度」
知 形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解している。 技 水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	発 花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 鑑 造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	態表 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したりする学習活動に取り組もうとしている。 態鑑 美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

知＝「知識・技能」の知識に関する評価規準，**技**＝「知識・技能」の技能に関する評価規準，**発**＝「思考・判断・表現」の発想や構想に関する評価規準，**鑑**＝「思考・判断・表現」の鑑賞に関する評価規準，**態表**＝表現の「主体的に学習する態度」に関する評価規準，**態鑑**＝鑑賞の「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価規準を表す。

※それぞれの評価規準は「内容のまとめりごとの評価規準」を、そのまま使用したり、具体的な学習活動を踏まえ言葉を省略や変更したりするなどしている(下線部は変更箇所)。

3 指導と評価の計画(7時間)

●学習のねらい・学習活動	知・技	思	態	評価方法・留意点等
1. 発想や構想(3時間) ● 作者の心情や意図に応じた多様な表現について考える。 ・「花」をテーマにした作品を鑑賞し、作者の意図や表し方などについて意見を	知 ↓		態表 ↓	態表 形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解しようとしたたり、主題と表現の工夫について考えようとしたりする意欲や態度を見取り、できていない生徒に対して主題の内容から作品を再度見つめさせるなどの指導を行う。【活動の様子，ワークシート】

述べ合いながら、主題と表現の工夫との関係について考えるとともに、形や色彩などが感情にもたらす効果や全体のイメージで捉えることを理解する。 ●主題を生み出す。 - それぞれの生徒が鉢植えの植物を選び、その花を選んだ理由を考えてみたり、興味をもった花や葉の形や色彩の特徴などから感じたことや考えたことを言葉で書き表したりしながら、主題を生み出す。 ●主題を基に構想を練る。 - 生徒が生み出した主題を基に、画面全体と花や葉との関係を考え、創造的な構成を工夫し構想を練る。		発 発 態表	知 形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解しているかどうかを見取り、できていない生徒に対して具体例を示すなどの指導を行う。【ワークシート、発言の内容】 発 花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出しているかを見取り、主題が生み出せていない生徒に花から感じ取ったことや考えたことなどを振り返らせるなどの手立てを講じる。【ワークシート、活動の様子】 態表 主題を生み出そうとしていない生徒を見取り、花と自己との関係を考えさせるなどの指導を行う。【活動の様子】 発 構想がまとまらない生徒を中心に見取り、指導を行う。【アイデアスケッチ】 態表 構想をしようとしていない生徒を見取り、主題を改めて見直させたり、造形的な視点に立って考えさせたりするなどの指導を行う。【活動の様子】 発 ここでは生徒が、主題を生み出し、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っているかどうかを暫定的に評価し、第二次で再度評価を行う。【ワークシート、アイデアスケッチ】 態表 楽しく発想や構想の活動に取り組み、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えることを理解しようとし、生み出した主題をよりよく表すために心豊かに構想しようとする態度を評価する。【活動の様子】
--	--	--	---

2. 制作（3時間） ●水彩絵の具の可能性を試す。 ・形や色彩などが感情にもたらす効果などを考えながら、水彩絵の具で、自己の構想に基づき、筆致を変えたり、絵の具の濃度などを変えたりするなど、様々な表し方を試して水彩絵の具の多様な表し方を身に付ける。 ●発想や構想を基に自分の表現意図に合う表現方法を工夫し表す。 ・自分の意図に応じて、水彩絵の具や筆の使い方などを工夫し表す。また、制作の途中に相互鑑賞を行い、他者の作品を見たり自分の意図を説明したりすることにより、より表したいものを明確にしていくなどしながら作品を完成させる。	技 ↓	発 ↓	態表	技 水彩絵の具の生かし方を身に付けられているかどうかや、様々な表し方を試して多様な表し方を身に付けているかどうかを見取り、できていない生徒には他の生徒の試作を紹介するなどして工夫について考えさせるような指導を行う。 【試作の作品】 態表 水彩絵の具の様々な方法を意欲的に試しているなどの態度を見取り、できていない生徒に対して参考作品を見せるなどして表現の工夫などについての興味や関心を高めるような指導を行う。 【活動の様子】 技 発想や構想をしたことなどを基に、意図に応じて様々な表し方を試して身に付けた水彩絵の具の生かし方を活用し、工夫して表しているかどうかや、態表 意欲的に工夫しているかなどの態度を見取り、実現できていない生徒に対して主題をもう一度見直させたり、表現の意図と水彩絵の具で試したことと関連させて再考させたりするなどの指導を行う。 【制作途中の作品、活動の様子】 発 配色などがまとまらない生徒を中心に見取り、指導を行う。【制作途中の作品】 知・技 作品から水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表しているかなどを見取るとともに、形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解していることを併せて見取り、知と技を知・技として一体的に評価する。【作品、アイデアスケッチ、ワークシート等】 発 主題の変化や配色計画などの構想を含めて、発想や構想を再度見取り評価する。 【完成作品】 態表 楽しく制作に取り組み、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えることを理解しようとし、意図に応じて工夫して表そうとしている態度を評価する。【活動の様子】
	知・技	発	態表	

3. 鑑賞（1時間） ●生徒作品や美術作品などから，作者の心情や表現の意図と工夫などについて考え，見方や感じ方を広げる。 ・お互いの完成した作品をじっくりと鑑賞し，作品から感じたことや考えたことを説明し合う。 ・第一次とは異なる「花」をテーマにした作家の作品を鑑賞し，作品の主題と表現の関係や，意図と工夫などについて自分の活動した体験から，新たな見方や感じ方を広げる。	知 ↓	鑑 ↓	態鑑 ↓ 態鑑	鑑 態鑑 作品の造形的なよさや美しさを感じ取り，作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えることなどができているかどうかなどと，取り組む態度とをそれぞれ見取り，できていない生徒に対して主題から作品を見つめさせたり，作者の心情について考えさせたりするなどの指導を行う。【発言の内容，ワークシート，活動の様子】 知 形や色彩などの効果や全体のイメージで捉えることを理解しているかどうかを見取り，できていない生徒に対して具体例を示すなどの指導を行う。【ワークシート，発言】 態鑑 楽しく作品を鑑賞し，形や色彩の効果や全体のイメージで捉えることを理解しようとし，造形的なよさや美しさを感じ取ろうとしたり，作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えようとしていたりしているかどうかを評価する。【活動の様子】
<授業外：題材が終了後>	知・技	鑑 発		知・技 完成作品やワークシートなどから【知・技】の評価を再確認し，必要に応じて修正する。【完成作品，アイデアスケッチ，鑑賞のワークシート】 鑑 作品の造形的なよさや美しさを感じ取り，作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えて見方や感じ方を広げられているかをワークシートで見取り評価する。【鑑賞のワークシート】 発 発想や構想について，主題や構想の工夫などを記述したワークシート等を完成作品と併せて再度見取り必要に応じて修正する。【完成作品，アイデアスケッチ，鑑賞のワークシート】

※指導と評価の計画の表の中の表記は以下の通りである。

- □

 は，授業の中で評価規準を通して，生徒の学習の実現状況を見取り，生徒の学習の改善や，教師の指導の改善につなげるために用いる「題材の評価規準」を示す。

-  は、題材の観点別学習状況の評価の総括に用いる「題材の評価規準」（授業内での評価を再確認するための評価も含む）を示す。ここでの評価が最終的に評定の総括にも用いることになる。
-  は、授業の中で評価規準を通して、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげる留意点について示している。
- **ゴシック体**は、題材の観点別学習状況の評価の総括に用いる評価についての評価方法や留意点について示している。
- **【 】**は、評価の方法や実現状況を見取るための資料を示す。

4 観点別学習状況の評価の進め方

（１）概要

美術の表現活動においては、「知識及び技能」である〔共通事項〕が示す造形的な視点の理解や創造的に表す技能と、「思考力、判断力、表現力等」の発想や構想に関する資質・能力は、制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものである。そのため、造形的な視点についての理解や創造的に表す技能、発想や構想に関する資質・能力は、机間指導をする中で制作途中の作品から見取ることができるという特色がある。

表現活動の途中で評価を行う際には、次のような考え方に基づいて整理をしている。「題材の評価規準」に示されている実現状況を見取るためには、制作を始めた初期の作品よりも、様々な資質・能力等が働いた跡が見られる完成間近の作品や完成作品から評価をすることが妥当であると考えられる。しかし、最終的に目標を実現するためには、まず主題を生み出し、次にアイデアスケッチ等で知識なども活用しながら構想を練り、最後に材料や用具を生かして作品を制作するといったそれぞれの学習が確実に行われることが大切である。そのため、それぞれの段階で「題材の評価規準」を位置付け、学習のねらいが実現できていない生徒を見取り指導をし、一人一人の生徒が段階を追って確実に学習を進められるようにしている。その際、例えば、アイデアスケッチ段階の発想や構想の評価は、配色等が十分見取れないので、暫定的に「おおむね満足できる」状況（B）等の評価し、完成が近付いた時点で再度評価を行い、最終的に授業外での完成作品で評価を確定するようにしている。

また、「知識・技能」の知識については、前半に「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に全体のイメージなどで捉えること」を理解させ、その後の表現の活動を通して、その知識が単に暗記的な理解ではなく、造形的な視点として実感的な理解をしているかどうかを重視して評価するようにしている。本事例では、「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に全体のイメージなどで捉えること」について実感的な理解をしていれば、そのことは作品にも表れてくると考えられる。そのことから、授業の前半の**知**の評価は、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いる。授業の後半で完成が近付いた時点で、作品やアイデアスケッチ、ワークシートなどから、形や色彩などが感情にもたらす効果や、美しさや生命感などの全体のイメージなどを意識して表現しているかどうかを**知**と**技**を合わせて一体的に評価している。また、創造的に表す技能が十分に身に付いていないことで完成作品からだけでは**知**が見取れない生徒については、発想や構想の段階におけるアイデアスケッチなどと併せて見取るようにした。

鑑賞活動においては、学習活動の観察を中心に鑑、態鑑の評価規準を、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いながら授業を行う。第三次は、態鑑の評価のみを確定し、鑑の評価は授業外のワークシートの記述等から評価している。

●事例における観点別学習状況の判断の例

題材の評価規準		◎Aの具体例 ■Cへの手立て
知	形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に美しさや生命感などを全体のイメージなどで捉えることを理解している。	◎形や色彩などが感情にもたらす効果を多様な視点から捉えて理解していたり、幅広い視野に立って造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージなどで捉えたりすることを理解したりしている。 ■形や色彩の感情にもたらす効果をより実感的に理解できるように、身近な体験などに関連付け考えさせる。
技	水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表している。	◎身に付けた水彩絵の具の生かし方を基に、表現方法の試行錯誤を重ね、表現の意図に応じて創意工夫し、よりよく表している。 ■具体的な筆づかいや水彩絵の具の生かし方について実演を行いながら説明し、試させたり、主題を確認させて生徒自身が表したいことを整理させたりする。
発	花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係を考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。	◎花を深く見つめて幅広い視点から形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、独創的な視点から画面全体と花や葉などとの関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。 ■様々な花を用意し、他の花に向き合わせたり、身近な体験などに関連付け、再度主題について考えさせたりする。また全体と部分の関係がわかりやすい作品を用い意図と表現の工夫について考えさせる。
鑑	造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	◎多様な視点に立って、造形的なよさや美しさをより深く感じ取り、主題と表現の意図と工夫などについて関連付けて捉え、自分なりの根拠をもって考え、見方や感じ方を広げている。 ■生徒自身の表現の活動における主題と表現の意図と工夫について振り返らせて、表現で学んだことと関連させながら見方や感じ方を広げられるようにする。
態表	美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に構想を練ったり、意図に応じて工夫して表したり	◎自ら進んで表現の活動に楽しく関わり、常によりよい表現を目指して、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えようとしたり、独創的な視点から心豊かに表現する構想を練ろうとしたり、表現方法の試行錯誤を重ね

	する学習活動に取り組もうとしている。	て創意工夫したりし、粘り強く表そうとしている。 ■形や色彩の感情にもたらす効果をより実感的に理解できるように、身近な体験などに関連付け考えさせる。 ■具体的な筆づかいや水彩絵の具の生かし方について試させたり、主題を確認させて生徒自身が表したいことを整理させたりする。 ■身近な体験などに関連付け、再度主題について考えさせる。また、全体と部分の関係がわかりやすい作品を用い意図と表現の工夫について考えさせる。
鑑	美術の創造活動の喜びを味わい楽しく花の美しさや生命感などを基に見方や感じ方を広げる鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。	◎自ら進んで楽しみながら、形や色彩の効果や全体のイメージで捉えようとしたり、作品のよさや美しさなどを新しい視点を探しながら感じ取ろうとしたりし、見方や感じ方を粘り強く広げようとしている。 ■自分の作品の意図と関連させ、他者の作品の特徴やイメージなどについて気付かせるようにする。

（２）本題材における指導と評価の流れ

ア「知識・技能」

（ア）「造形的な視点を豊かにするための知識」

この観点は、「造形的な視点を豊かにするための知識」として、形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージなどで捉えることの理解について評価するものである。ここでの知識は、表現や鑑賞の場面において、学んだ知識を生かして、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりできるようになるなど、単に暗記することに終始するような知識ではなく、美術の学習の中で生きて働く知識として実感的に理解した実現状況を評価することが求められる。

知（第一次、第二次、第三次、授業外）

第一次では、形や色彩などが感情にもたらす効果についての学習や、花や参考作品などを見る活動を通して、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージなどで捉えることについて理解ができるようにする。ここでは形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉えたり、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりするなどの造形的な視点を豊かにすることが重要である。ここでの評価は、授業の中で、生徒の学習の実現状況を見取り、生徒の学習の改善や、教師の指導の改善につなげるために用いる。そして、第一次の発想や構想をする場面、第二次の創造的に表す技能を働かせる場面、第三次における感じ取ったり、考えたりする鑑賞の場面のそれぞれにおいて、造形の要素の働きについて意識を向けて考えたり、大きな視点に立って対象のイメージを捉えたりできるようにし、表現及び鑑賞の学習を深めることができるようにすることに重点を置く。

本題材では、観点別学習状況の評価の総括に用いる評価としては、「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、全体のイメージなどで捉えること」について実感的な理解をしていれば、そのことは作品にも現れてくると考えられる。そのことから、第二次において作品から、**技**の水彩絵の具や用具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表しているかを評価する際に、**知**の形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージなどで捉えることを理解していることを併せて見取り、**知**と**技**を一体的に評価している。単に、花の形を描き、花びらは赤で、葉や茎は緑で塗るのではなく、例えば、花の柔らかさや温かさ、全体のイメージなどを意識しながら花びらの形を描いたり着色したりすることが大切であり、評価もその視点から**知**と**技**を一体的に行うことが考えられる。また、ある程度、造形的な視点について理解はしているが、創造的に表す技能が十分に身に付いていないことで完成作品からだけでは**知**が見取れない生徒がいることも考えられるため、授業外において、発想や構想の学習で作成したスケッチや、鑑賞活動でのワークシートなどで再確認にすることとした。

(イ)「創造的に表す技能」

この観点は、材料や用具の生かし方などを身に付け、生徒が意図に応じて工夫して表すなどして創造的に表している状況の評価するものである。創造的に表す技能は制作が進む中で徐々に作品に具体的な形となって現れるものである。そのため制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の創造的に表す技能の高まりを読み取ることが大切である。

技（第二次、授業外）

ここでは、第二次の1時間目において、水彩絵の具の生かし方を身に付けているかどうかを見取り、身に付けられていない生徒の指導を中心に行う。制作が進んできた2時間目から3時間目にかけて、多くの生徒が水彩絵の具や用具を工夫して表現できるようになってきた時点で、工夫等ができていない生徒に重点を置いて見取るとともに、工夫等ができるように指導をする。完成が近付いてくる第二次の後半は、「十分満足できる」状況（A）と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定する。また、授業中に評価を行った後に作品が変化する場合もあるので、さらに、作品の完成後、授業外に完成作品をワークシート等と見比べながら完成作品からも再度確認することが大切である。

イ「思考・判断・表現」

(ア)「発想や構想に関する資質・能力」

この観点は、生徒が花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、画面全体と花や葉との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練る資質・能力を評価するものである。発想や構想は、制作が進む中で徐々に具体的な形になり、更にそこから深まることが多い。そのため制作途中の作品を中心に、完成作品からも再度評価し、生徒の発想や構想に関する資質・能力の高まりを読み取ることが大切である。

発（第一次、第二次、授業外）

第一次の前半では、生徒が主題を生み出すことが重要である。そのため、第1時間目の後半から第2時間目には主題が生み出せていない生徒を把握することに重点を置き、主題を生み出せるように指導をする。ここで主題を生み出すことは、本学習を進めるうえで基盤となるものであり、発想や構想を高めるための重要な部分であるので、一人一人の生徒が主題を生み出すことができるように、丁寧に見取り指導をしていくことが大切である。その際、「知識」と関連付け、造形的な視点を豊かにもちながら、主題を生み出せるよう留意する。ワークシートなどの記述やマインドマップなどを利用し、生徒が考えを可視化したものを評価資料とすることが考えられる。

後半では、主題を基に、豊かに構想を練ることが重要である。後半初期の構想を練り始めた段階では評価の記録をとらず、生徒が共通につまずいている点を学級全体に指導したり、個々の生徒の課題に対して個別指導をしたりする。学習が進み多くの生徒の構想がまとまってきた時点で、まだ構想がまとまらない生徒に重点を置いて見取るとともに、構想がまとまるように指導し、暫定的に評価する。第二次では、制作の中で配色などの構想も見取れるようになる。作品の完成が近付いてくる段階では、「十分満足できる」状況(A)と判断される生徒も見取れるようになり、授業中での評価を確定する。また、ここでの評価も創造的に表す技能と同様に、授業外においても再度評価し、授業中での評価より高まりがあった場合には修正を加える。

(イ)「鑑賞に関する資質・能力」

この観点は、造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情などについて考え、見方や感じ方を広げるなどの資質・能力を評価するものである。本事例では、第一次にも鑑賞的な活動が位置付けられているが、ここでのねらいは、発想や構想に関する学習を深めるための活動であるため鑑賞は位置付けていない。第三次の鑑賞の活動は、作品から造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げることをねらいとしていることから、鑑賞の評価の対象として位置付けている。

鑑賞（第三次，授業外）

ここでは、生徒作品を相互に鑑賞したり、「花」をテーマに描いた作家の作品を鑑賞したりし、造形的なよさや美しさを感じ取り、自分との関わりで作者の心情や意図と表現の工夫などを考えたりしながら見方や感じ方を広げているかどうかを見取る。ここでの評価は、生徒のワークシートの記述や発言内容から行うことになる。しかし、授業中に鑑賞の指導をしながら全ての生徒を評価することは困難であることから、授業中は、ワークシートの記述や発言内容等から、鑑賞が深まっていない視点等について、個々の生徒や学級全体に助言をすることに重点を置く。加えて、生徒の発言の内容に、「十分満足できる」状況(A)に該当するものがある場合には、その評価を記録しておく。観点別学習状況の評価の総括に用いるための評価は、授業終了後にワークシートの記述を基に評価をすることが基本になる。その際、ワークシートの記述からの評価では「おおむね満足できる」状況(B)であるが、授業中の発言内容は「十分満足できる」状況(A)と判断される場合に、「十分満足できる」状況(A)と評価することなどが考えられる。

ウ「主体的に学習に取り組む態度」

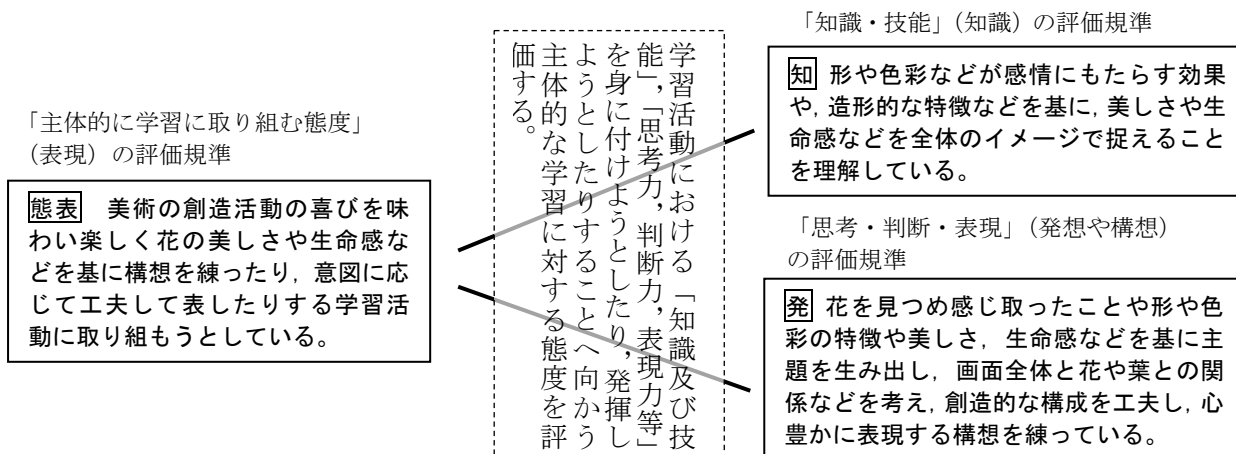
この観点の評価対象は、生徒が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けようとしていたり、発揮しようとしていたりすることへ向かう主体的な学習に対する態度である。特に表現活動では、発想や構想を練るためにアイデアスケッチを熱心に繰り返し描いたり、創造的に表す技能を働かせるために絵の具で色を試したり塗り重ねたりするような能動的な姿が授業の中で現れることがある。机間指導等の際にこのような試行錯誤を繰り返し粘り強く取り組んだり、よりよい表現を目指して構想や技能を、工夫改善したりしていく様子などの姿を捉えながら指導と評価を行うことが大切である。

本事例に該当する第1学年では、「評価の観点及びその趣旨」において「美術の創造活動の喜びを味わい楽しく表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。」としており、その趣旨に応じて生徒の実現状況を見取ることが求められる。ここでの「楽しく」とは、単に表面的な楽しさだけではなく、夢や目標の実現に向けて追求し、自己実現していく充実感を伴った喜びのことである。それは、生徒一人一人が、目標の実現のために創意工夫を重ね、一生懸命に取り組む中から生じる質の高い楽しさである。創造活動の喜びは、新しいものをつくりだす表現及び鑑賞の活動を通して、個性やよさを発揮して自己実現したときに味わえる喜びである。したがって、第1学年の「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、生徒自らが学習の目標を明確にもち、その実現に向けて意欲的に取り組む学習の過程を大切にすることに留意する。

本事例では、「2 題材の評価規準の作成 (1)「内容のまとまりごとの評価規準(例)」から題材の評価規準を作成する」で示したとおり、「内容のまとまりごとの評価規準(例)」から題材の「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準を作成している。本参考資料第2編の「内容のまとまりごとの評価規準(例)」に示された「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準は、各領域の内容のまとまりごとの全体におけるものとして示されているものであることから、題材において評価に用いるときには、題材のそれぞれの時間の学習活動に該当する「知識・技能」、「思考・判断・表現」の題材の評価規準と対応させて、より具体的に生徒の「主体的な学習に取り組む態度」における実現状況を見取ることが大切である。【図③】参照)

【図③】

本事例「花の命を感じて」の第一次における「●主題を生み出す」「●主題を基に構想を練る」学習活動の「主体的に学習に取り組む態度」(表現)の評価の例



態表

本事例の題材の表現に関する「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準（**態表**）は、第一次の発想や構想の学習活動における「主体的に学習に取り組む態度」と、第二次の創造的に表す技能を働かせる学習活動における「主体的に学習に取り組む態度」の二つの評価場面を位置付けている。

態表 （第一次）

第一次の前半では、作品と楽しく関わり、形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などを全体のイメージで捉えることを理解しようとしている姿を見取る。参考作品等に表現されている形や色彩などに興味や関心がもてず造形的な視点について理解しようとする意欲が見られない生徒を把握することに重点を置き、それらの生徒に対しては、関心や意欲が高まるように机間指導等をする。

発想や構想に入った段階では、生徒が花を見つめ感じ取ったことや形や色彩の特徴や美しさ、生命感などを基に主題を生み出し、創造的な構成を工夫し、楽しく心豊かに表現する構想を練ろうとする発想や構想への意欲や態度を高めることが重要である。そのため、前半には題材に興味や関心がもてず、主題を生み出そうとしていない生徒を把握することに重点を置く。それらの生徒に対しては、意欲が高まるように机間指導等をする。

後半から終盤では、生徒が造形的な視点を意識しながら生み出した主題をよりよく表すために心豊かに構想しようとしている意欲や態度を見取る。第一次を通して、よりよい発想や構想を目指して改善を繰り返したり、継続して意欲的に取り組んだりする姿などを総括に用いる評価として記録をしておく。

態表 （第二次）

第二次では、生徒が水彩絵の具や用具の生かし方などを身に付け、楽しく意図に応じて工夫して表そうとする態度を高めることが重要である。そのため、前半は、制作への意欲がもてない生徒を把握し、楽しく意図に応じて創造的に表そうとする態度が高まるように指導をする。また、造形的な視点について意識できていない生徒を把握し、関心や意欲が高まるように机間指導等をする。

中盤から終盤では、生徒が楽しく制作に取り組み、造形的な視点を意識しながら技能を働かせて工夫して表そうとしている態度を見取る。制作の段階で創造的に表す技能を働かせる学習における「主体的に学習に取り組む態度」は、よりよい表現を目指して試行錯誤する姿や、知識や技能を身に付けようと継続的に意欲を発揮している姿などを評価することが大切なので、前半と後半の状況とを同等と扱い総括に用いる評価として記録をしておくことなどが考えられる。

態鑑 （第三次）

第三次では、生徒が作品などの造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、楽しく見方や感じ方を広げようとしていく意欲や態度を高めることが重要である。評価は、生徒が他者の作品を鑑賞する様子などを基に、鑑賞への関心や意欲等を把握することに重点を置き、本時において楽しく作品を鑑賞し、造形的な視点を活用しながら造形的なよさや美しさを感じ取ろうとしたり、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えようとしたり

しているかを見取り、総括に用いるための記録をしておく。

5 観点別学習状況の評価の総括

(1) 各観点の構造と総括の考え方

本事例では、「知識・技能」の評価は、**知**と**技**を**知・技**として一体的に総括している。「思考・判断・表現」の評価は、**発**と**鑑**の結果を合わせて総括している。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、**態表**（第一次）、**態表**（第二次）、**態鑑**の結果を合わせて総括している。

(2) 観点別学習状況の評価の総括の具体

「題材の評価規準」に照らして、「A」、「B」、「C」の3段階で行った評価結果を基に、題材として観点ごとに「A」、「B」、「C」で評価の総括を行う。ここでは、評価の観点によって、「学習活動に即した評価規準」の評価結果のうち、最も数の多い記号が、観点ごとの学習状況を最もよく表しているという考え方と、複数回評価したうちのどれかに重みを付けるという考え方に立って評価の総括を行った。例えば、ある観点の「題材の評価規準」を三つ設定し、それぞれの評価結果が「A、A、B」なら、「A」と総括する。ただし、「A」、「C」の両方が含まれている場合は、「B、B」と同様の評価結果と見なして総括するのが適当であると考えた。また、評価結果が「A、B」のように「A」の数と「B」の数が同数になることがある。このような場合は、例えば、学習のねらいや時間数等に応じて、特定の「題材の評価規準」に重み付けをすることや、「A」「B」が同数であれば「A」とするなど、あらかじめ総括する方法を決めておくことが大切である。

〈本題材での評価の総括の具体〉

ア「知識・技能」の評価の総括

本事例では、「形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、全体のイメージなどで捉えること」について実感的な理解をしていれば、そのことは発想や構想したことを基に技能を働かせて表された作品に表れてくると考えた。ここでは、水彩絵の具の生かし方などを身に付け、意図に応じて工夫して表しているかどうかを評価する**技**の結果と、形や色彩などが感情にもたらす効果や、造形的な特徴などを基に、美しさや生命感などの全体のイメージなどで捉えることを理解していることを評価する**知**の結果を合わせて**知・技**として一体的に総括し、「知識・技能」の評価とした。

イ「思考・判断・表現」の評価の総括

第一次及び第二次において評価した、**発**の実現状況の結果と、第三次において評価した**鑑**の実現状況の結果とを合わせて総括し、「思考・判断・表現」の評価とした。その際、第一次と第二次における**発**と関連する学習活動の時間は合わせると6時間、第三次における**鑑**と関連する学習活動の時間は1時間であることや、本題材の目標では表現に関する資質・能力の育成に重点を置いていることなどから、「思考・判断・表現」の評価では、主題を基にどのような構想を練ったかが重要であると考え、**発**に重み付けをして総括している。

ウ「主体的に学習に取り組む態度」の評価の総括

「表現」における「態表」（第一次）、「態表」（第二次）と「鑑賞」における「態鑑」（第三次）の場面で評価を行っているが、本題材における「主体的に学習に取り組む態度」は、表現や鑑賞の活動を通してある程度継続的に実現していることが大切である。したがって、「表現」の場面において評価した結果と「鑑賞」の場面において評価した結果を同等に扱うことが考えられる。

<本事例における観点別学習状況の評価の総括の例>

観点	「知識・技能」		「思考・判断・表現」			「主体的に学習に取り組む態度」			
氏名	評価規準	評価	評価規準		評価	評価規準			評価
	知・技		発	鑑		態表	態表	態鑑	
い	A	A	B	A	B	B	A	A	A
ろ	B	B	A	B	A	B	A	B	B
は	C	C	C	B	C	C	C	B	C
に	A	A	A	B	A	A	A	B	A
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...